

読書量・不読率の改善の陰で低下する中学生読書の質

著者	折川 司
著者別表示	Orikawa Tukasa
雑誌名	言語表現研究
巻	35
ページ	11-24
発行年	2019-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2297/00054012



読書量・不読率の改善の陰で低下する中学生読書の質

折 川 司

1 はじめに

近年、学校における子どもたちの読書環境は非常に充実している。例えば、学校図書館には、様々なジャンルの書籍が手に取りやすいように配架され、新しく登録された書籍が色鮮やかなPOPと共に目立つように展示紹介されている。また、図書委員会によって読書イベントが行われることも多く、学校図書館を活用した調べ学習も盛んである。公共図書館や書店などと同様、学校は本に誘う工夫に溢れている。教師や学校司書は、こうした書籍の整備やイベント開催といった地道な取組の積み重ねが子どもたちと読書の距離を確実に縮めていると感じており、貸出冊数や来館者数、購入本リクエスト数などの伸びに、その裏付けを見出している。

しかし一方で、マスメディアは、テレビ・漫画、ゲーム機、携帯端末への若い世代の依存・没入と、それと連動する形で読書¹⁾の衰退をしばしば話題にする。確かに、特に中高生の中にはSNSや動画サイト、スマートフォンゲームへの著しい関与を続けている者は少ないとは言えず、それ故に、彼らと読書との距離は開き続けているのだという見方は、それなりに理解できる。

こうした二つの捉えは、一見相反したものであるように見える。そのため、一方が正しく、他方が誤りであると断じてしまいがちであるが、実際はそう単純ではない。実は双方が読書実態をそれなりに正しく把握しており、同時に、それぞれに見えていないものがあるとも考えることができる。

本稿においては、中学生の読書活動に焦点を合わせ、それを量と質の二つの面から整理していく中で実態の概容を把握していく。

2 「学校読書調査」から窺える中学生の読書実態

(1) 継続調査されてきた読書量と不読率

毎日新聞社は、全国学校図書館協議会（全国SLA）の協力を得て「学校読書調査」を毎年実施している。これは小中高の三校種における子どもたちの読書実態のサンプル調査であり、書籍・雑誌の平均読書量や不読率などは継続的に、また、それぞれの時代に応じて携帯電話の所有や新聞の閲覧状況などが調べられてきている。初回調査は1954年であり、1962年に一度途切れるものの、翌年の第9回調査以降2018年の今日に至るまで長年続けられている。調査時期は6月上旬に設定されており、その結果は同年10月に新聞紙上に公表され、翌年に刊行される流れとなっている。

この「学校読書調査」に示された数値を足がかりとしつつ、独自アンケートの

結果分析等も加味しながら中学生の読書実態を整理していく。

(2) 2003年以降の読書量の急増

「学校読書調査」において継続的に調査されているもののうち、中学生の書籍の平均読書量と不読率の数値を抽出すると、下の【表1】のようになる。【表1】には、現在と同様の形での調査が始められた第9回以降のデータを掲げたが、開始当初の数値には若干の不安定さを見ることもできるため、本稿においては第9回から第13回までの5年間に目を向けることはせず、第14回から第63回までの50年間の調査結果に着目していくことにする。

まず、書籍の読書量に目を向けてみたい。「学校読書調査」における書籍の読書量とは、「5月1か月間に子どもたちが読んだ書籍の平均冊数（教科書、マンガ、雑誌などを除く）」²⁾となっている。

【表1】

調査回	9	10	11	12	13	14	15
年	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969
読書量	3.2	2.1	2.3	1.9	2.5	2.2	1.5
不読率	11.5	33.1	27.4	34.4	27.1	32.1	43.0

調査回	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
年	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
読書量	1.9	2.0	2.1	2.3	2.1	2.4	2.0	2.5	2.0	2.0
不読率	36.2	35.2	34.1	31.4	34.9	29.9	37.4	31.7	35.1	38.5

調査回	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
年	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
読書量	1.9	1.7	1.9	1.8	2.1	1.9	1.8	2.3	1.9	2.1
不読率	37.3	42.0	42.3	44.1	42.8	45.0	43.5	43.9	45.3	41.9

調査回	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
年	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
読書量	2.1	1.9	2.1	1.7	1.7	1.8	1.9	1.6	1.8	1.7
不読率	41.9	50.4	45.8	51.4	49.9	46.7	51.9	55.3	47.9	48.0

調査回	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
年	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
読書量	2.1	2.1	2.5	2.8	3.3	2.9	2.8	3.4	3.9	3.7
不読率	43.0	43.7	32.8	31.9	18.8	24.6	22.7	14.6	14.7	13.2

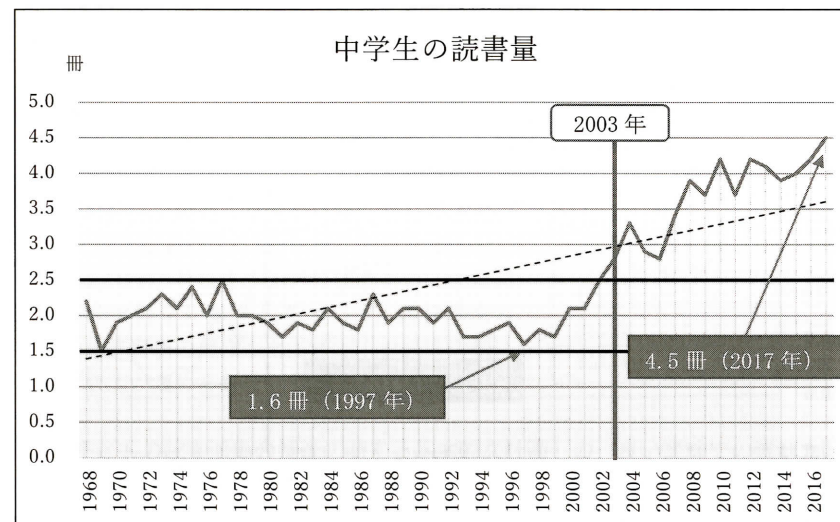
調査回	56	57	58	59	60	61	62	63
年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
読書量	4.2	3.7	4.2	4.1	3.9	4.0	4.2	4.5
不読率	12.7	16.2	16.4	16.9	15.0	13.4	15.4	15.0

概容をつかむために、その数値をグラフ化すると下の【図1】のようになる。破線で示した近似曲線が右上がりになっていることから分かるように、中学生の読書量は、全体的には増加傾向にあるといつてよい。

年を追ってもう少し細かく見ていくと、およそ80年代までは、小刻みに浮沈を繰り返しながらも2冊程度の読書量を保ってきていることが分かる。しかし、90年代に入ればしばらくすると2冊未満が次第に常態化し、1997年には1.6冊という最低値をマークしている。こうした1997年までの推移を捉えて、「1987年の2.3冊を一つのピークとして、それ以降、1997年まで下降を続けた」「1997年を境にV字回復を見せた」と分析することもできる。けれども、1968年から2002年までの35年間を見ると、その期間中は 2 ± 0.5 冊という狭い範囲の中で数値が変動しており、長期的には比較的安定した状態が維持されていたと言えよう。

この安定状態が良い意味で崩れていったのが、最高値を更新した2003年（2.8冊）以降である。この頃から中学生の読書量が急激に増え、翌年の2004年には一時3冊を、また2010年には4冊を越えるなど、最高値は更新を続けていく。そして、直近の2017年調査においては、調査開始以来最高値となる4.5冊という結果が示されるに至っている。4.5冊という数値は、1997年に記録した1.6冊のおよそ3倍である。2002年からの16年間に生じた読書量の増加は、1968年からの35年間に見られた ± 0.5 冊の変動とは違う、極めて大幅なものである。

こうした読書量の増加自体は純粋に喜んでよいものではあろうが、1968年からの35年間には一度も出現しなかった急上昇が2003年以降に頻出しているという点に戸惑いを覚えることも確かである。こうした急激な変化は、「学校読書調査」において読書量とともに継続調査されている不読率の推移からも窺うことができる。



【図1】

(3) 不読率にも見られる急激な改善

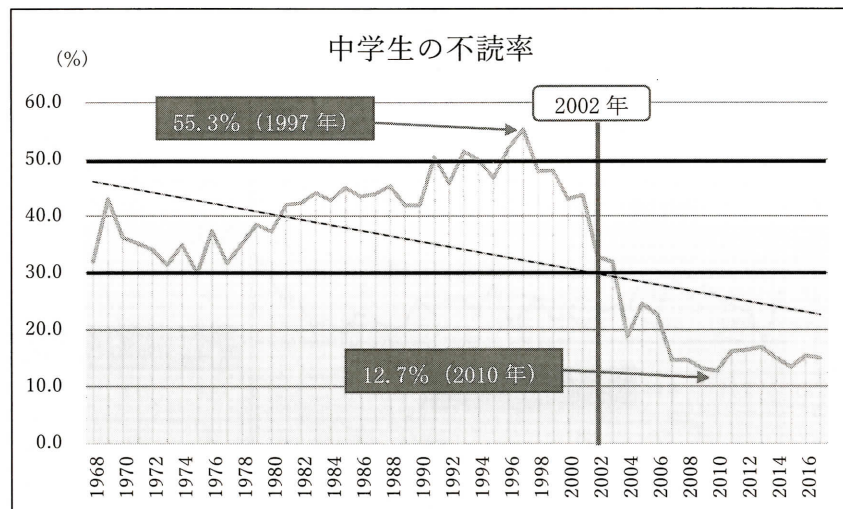
「学校読書調査」において調べられている不読率とは、「5月1か月間に子どもたちが読んだ書籍の平均冊数（教科書、マンガ、雑誌などを除く）」が0冊であった者の全体における割合である。

この数値をグラフ化すると【図2】のようになる。不読率も、前項に整理した読書量と同様、50年間を通して改善傾向にあり、それは右下がりを見せる近似曲線からも読み取ることができる。

不読率を細かく見ると、僅かではあるが1975年に30%を下回ったり、逆に90年代に50%を超える年があったりといった局所的な乱高下は確認できる。しかしながら、ロングショットで眺めると、1968年から2001年までの34年間は $40 \pm 10\%$ という中で数値が保たれてきたことが分かる。調査開始後、およそ20世紀のうちは、中学生の半数弱が1か月間に1冊も本を読んでいなかったという状態が続いていたということである。けれども、そうした安定状態は2002年を境に大きく崩れていっている。

(4) 読書量・不読率の昇降と新しい機器や魅力的なメディアの影響

読書量と不読率は共に、1968年から2017年までの50年間において、1997年に最も悪い数値をマークしている。毎日新聞社と全国SLAは、1997年に至る期間を中学生読書のいわば衰退期のように捉え、その原因として、受験勉強による読書時間の減少とともに「テレビの普及」を挙げている³⁾。新しい機器やメディアが日常生活に流入・浸透したことによって、中学生の中での物事の優先順位に変動があり、本に親しんでいた日々が阻害されるに至ったという論理である。また、特に1997年の落ち込みに関しても、「マンガや雑誌」「テレビやビデオゲーム」といったものが主



【図2】

因であることを指摘している。新しい機器や魅力的なメディアが当時の中学生の興味を強く引いたことに疑問を挟む余地はない。

しかしながら、ここまでにおいて確認したように、1968年からの34、5年間は、読書量と不読率の数値が比較的安定していた期間である。数値上、それほど極端な変動はなかった期間であり、新しい機器やメディアの普及が原因となって豊かな読書生活が侵食されたというには若干無理がある。

また、学業が忙しいという状況や新しい機器やメディアの流入・浸透は、何も当時に限ったことではない。現代の中学生が学習塾や多くの習い事に追われている事情も、スマートホンやタブレットなどの端末や携帯ゲーム機が巷に溢れる状況も、実は当時と類似したものである。

にもかかわらず、21世紀冒頭に読書量と不読率がドラスティックな改善を見せている点から考えると、魅力的で新しい機器やメディアの登場が中学生の読書生活を阻んでおり、それらが影響しなければ読書量も不読率も悪化することはなかったというような見方には懐疑的にならざるを得ない。中学生の読書活動が改善・向上したり、停滞・低下したりするのは、学業面の繁閑や魅力的な機器、新しいメディアの有無などではなく、全く別の要素に因ると考えるのが妥当である。

3 国のリーダーシップによる読書活動推進の有効性

(1) 子ども読書の停滞と「子ども読書活動の推進に関する基本的な計画」の策定

子どもの読書活動の停滞が問題視される中、2001年に公布された「子どもの読書活動の推進に関する法律」の第八条第一項に基づいて、翌2002年に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（第一次）が策定されたことはよく知られている。この「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（以下「推進に関する基本的な計画」とする）」には、「学校読書調査」や「全国学力・学習状況調査」、「社会教育調査」、「生徒の学習到達度調査」、「PISA」などの関連するデータも取り入れられており、それらの分析も踏まえて、地域と家庭、学校が一体となって子どもの読書活動を総合的・計画的に推進していくことが目指されている。

【表2】

計 画	策定年
第一次 基本計画	2002年
第二次	2008年
第三次	2013年
第四次	2018年

計画の内容は概ね5年間を見通したものとなっており、その更新は【表2】に示した通りである。現在は2018年4月に走り始めた第四次の「推進に関する基本的な計画」⁴⁾に基づいて、読書環境の整備や読書習慣の確立など、子どもの読書活動に関する取組が進められている。

(2) 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の“良い意味での強制力”

こうした「推進に関する基本的な計画」の策定と、読書量や不読率の改善は、定期的に重複している。34、5年間という極めて長期に亘って、自治体や学校が子どもの読書を活性化するための取組を種々工夫してきたにも拘わらず、読書量や不読

率の面で明らかな良い変化を導き出すことができていたという状況が、今世紀初めに急激に改善したのは、こうした国のリーダーシップが自治体や学校に強く揺さぶりをかけ、それが中学生の読書を著しく変容させたからであると考えてよいだろう。その揺さぶりとは、例えば、読書習慣の確立に向けて「推進に関する基本的な計画」に明記された、全校一斉の読書活動の推奨である。

実施方法にも因るが、一斉読書は、選書に自由度があるものの、基本的に各生徒が読書と向き合わざるを得ない状況を作り出す。良い意味で「強制された」自由読書である。子どもたちの読みたいという気持ちを刺激し、増幅させて、本の世界に上手に引き込むというソフト面の取組とは違い、制度構築によって読書という場所と時間を設け、そこに生徒を放り込むというやり方である。少々乱暴に見えるところもあるが、一斉読書によって、形式上は不読率が確実にほぼゼロになり、それと連動して読書量も増えていくことは間違いない。

こうしたことから、読書量や不読率の昇降に大きく影響を与えるのは、新しい機器やメディアの存在など、書籍以外の魅力的な事物ではなく、場と時間を作り出す良い意味での強制力の有無と考えることができる。

(3) 分かりやすい量的な指標

全校一斉の読書活動の実施率をはじめとして、児童用図書の貸出冊数や公立図書館数、児童室を設けた図書館数、OPACの導入率、学校司書の発令率、司書教諭の配置率など、「推進に関する基本的な計画」は、その成果が基本的に全て数値で提示されている。こうした量的な側面への着目は、サンプル数が豊富であれば、ある程度事象を客観的に捉えることができるという良さがある。また、数値であれば、それをもとに表やグラフを作成することもできるため、スケールや変化を視認しやすく、他者とも共有しやすい。

2018年現在、「推進に関する基本的な計画」を踏まえた「子供の読書活動推進計画」を策定している自治体の割合は、都道府県では100%、市では89.9%となっており、それぞれが本に触れるきっかけづくりや授業や朝の読書活動の推進、学校図書館の充実等に精力的に取り組んでいる⁵⁾。そうした高い実施率からは、各自治体と、そのもとで改善を具体的に推し進める学校や公立図書館などが「推進に関する基本的な計画」に示された、分かりやすく、共有しやすい量的な成果を「次に乗り越えるべき全国共通の明瞭な目標」として捉え、その改善・向上に取り組んでいっている現状を窺うことができる。

しかし、この「量」という分かりやすい指標が、中学生の読書に対する見方や読書推進に対する考え方を、意図せずミスリードしてしまったことも否定できない。「実施した」「取り組んだ」をベースとして、その上に「たくさん」や「いろんな」といった要素を加えていくことに価値があるという認識への誘導である。読書量や不読率の改善からも分かるように、量的な側面の重視は方向性として無論誤りではなく、大切なことの一つであることに間違いはないが、そこに大きく偏っていくと、読書における質的な側面が相対的に軽視されてしまう危険性も生じる。質的な側面

とは、例えば「読書対象」「読み方」「読書観」のようなものである。

4 量的側面への着目と重視が結果的にもたらした質の軽視

(1) 名作・古典からライトノベル・ライト文芸へ変化した中学生の読書対象

「学校読書調査」には、例年、中学生の「5月1か月に読んだ本」のベスト20も掲載されている。その1968年の中学3年生（男女）の上位15作品を抽出して順に示すと、次のようになる⁶⁾。書名の右に付された数字は読者数であり、母数は4,410名⁷⁾である。

【表3】

坊っちゃん	33	ケネディ	29	次郎物語	21
二十四の瞳	18	陽のあたる坂道	16	戦争と平和	15
嵐が丘	15	野菊の墓	15	十五少年漂流記	14
車輪の下	13	走れメロス	12	吾輩は猫である	12
風と共に去りぬ	11	ロミオとジュリエット	11	友情	10

これらは概して、名作・古典という評価が、ある程度確立している書籍と言ってよい。中学校国語科において広く活用されている便覧・資料集の中にも、多くの書名を確認することができる。1968年には、他に『伊豆の踊子』(9)や『あしながおじさん』(8)、『アンネの日記』(8)なども上位に並んでいる。

また、時代の空気が手に取らせたのか、『戦争と平和』のような、中学生にとっては少々難解な上に、現代では成人でも手に取るのが躊躇われるような19世紀の長編ロシア文学もよく読まれている。ロシア古典では『アンナ・カレニナ』(8)も比較的ポイントが高く、また、前年の1967年の集計には『罪と罰』の名前も見ることができる。これらの書籍は中学生向けに抄訳されたものかもしれないが、こうした選書傾向からは、自身が正に大人の入口に立っており、読了までにはかなりの根気が必要とされる書籍にも果敢に挑戦しよう、しなければならないという中学3年生なりの自覚や矜持のようなものが透けて見える。

【表4】

君の臍臓を食べたい	34	ひるなかの流星	20	ぼくは明日、昨日のきみとデートする	17
君の名は。	15	ハリー・ポッターと炎のゴブレット	14	か「」く「」し「」ご「」と「」	10
また、同じ夢を見ていた	10	この素晴らしい世界に祝福を！①	10	植物図鑑	9
世界から猫が消えたなら	9	この素晴らしい世界に祝福を！②	8	告白	8
ちょっと今から仕事やめてくる	8	天国までの49日間	8	図書館戦争	7

無論、『シャーロック・ホームズ』や『怪盗ルパン』といった若干ライトなシリーズも好まれてはいたが、【表3】の作品群からは、当時の中学3年生が比較的菌ごたえのあるものを手に取る傾向にあったことは明らかである。

一方、2017年の上位15作品は、前頁【表4】のようになる。全てが新刊、もしくは数年前に出版された近刊であり、1968年の15作品とは全く重なりがない。『この素晴らしい世界に祝福を!』『君の睥睨を食べたい』『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』のような、いわゆるライトノベルやライト文芸⁸⁾に分類される作品が大半であり、いわゆる名作・古典の類は選外の『人間失格』(6)のみとなっている。

(2) 通過儀礼としての洗礼本の衰退

1968年と2017年の「5月1か月に読んだ本」の上位作品の比較から、両者には全く重なりがなく、また近年は読書対象として新刊・近刊が好まれる傾向にあることが読み取れた。そうした様相は、例えば北陸の国立A中学校の学校図書館の貸出記録にも見出すことができる。A校では、年度末に年間貸出冊数の上位20作品を紹介しているが、2017年度は、ライトノベルやライト文芸に分類されるであろうものが17も入っている。残り3作品は恩田陸や湊かなえといった若い世代に人気の現代作家によるものであり、いわゆる名作・古典は上位20作品に含まれてはいない。

越谷和子は、時代を超えて読み継がれてきた作品があることを指摘し、それを「洗礼本」と呼んでいる⁹⁾。越谷は1955(昭和30)年から1979(昭和54)年の中学生の洗礼本として『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『路傍の石』『赤毛のアン』『若草物語』『アンネの日記』などを挙げている。

竹内洋は、京都大学教養部学生に対する読書調査(1955年)において71.6%の学生が『若きウェルテルの悩み』を読んでいたという結果を示しながら、「実際に読んだか読まないかは別にしても、教養書を読まなければならない、という正統文化への信仰告白はみえてくる。」と述べている¹⁰⁾。この考察を踏まえると、越谷のいう「洗礼本」は、長編であったり難解であったりといった種々の障壁を抱えてはいたが、正統文化への中学生なりの憧れであり、教養を積むためのある種の挑戦であり、大人になるための通過儀礼であったと言える。【表3】に掲げたような作品は、そうした対象の代表であったのかもしれない。

しかしながら、越谷が例示したような名作・古典に最近の中学生の多くは目を向けず、現在は、【表4】に確認したように、ライトノベルやライト文芸が存在感を増している。選書において中学生が重視するポイントが変化したといえる。

(3) 大量消費行為としての中学生の読書

次に、1968年とその前年の1967年、及び2017年とその前年の2016年の、「5月1か月に読んだ本」のベスト20の、それぞれ上位15作品を照合し、重複をみてる。その結果は【表5】のようになった。

1968年と1967年においては10作品が重複しており、当時は、こうした書籍が中学3年生の洗礼本として毎年読まれていたことが窺える。越谷和子が例示した『坊っ

【表5】

1968年と1967年の重複		2017年と2016年の重複
※()内は1967年の読者数		※()内は2016年の読者数
①吾輩は猫である (49)	⑥車輪の下 (20)	①告白 (8)
②坊っちゃん (33)	⑦二十四の瞳 (16)	
③友情 (24)	⑧野菊の墓 (16)	
④風と共に去りぬ (23)	⑨嵐が丘 (15)	
⑤次郎物語 (20)	⑩陽のあたる坂道 (13)	

ちゃん』や『吾輩は猫である』も確認できる。

一方、2017年と2016年の重複は僅か1作品である。名作・古典どころか、新作・話題作であっても翌年には多くの読者から見向きもされなくなり、読書対象から外されてしまう。これは、現代の中学生が流行に敏感であり、各自の嗜好も明瞭だとも解釈できる。同時に、2017年の月間読書量が平均で4.5冊になっているという点を踏まえると、世代やコミュニティ内での選書に関する共通の価値観や強い指向性がない中で、彼らが大量のライトノベルやライト文芸を高速で「消費」し続けているという様相も浮かび上がってくる。

(4) 中学生を魅了するライトノベルの「軽さ」「近さ」「スピード感」

中学生に広く読まれているライトノベルやライト文芸とは、一体どのようなものであろうか。大橋崇行は、ライトノベルと呼ばれる作品群が「非常に広い範囲にまで拡散している」として、その括り方の難しさを強調しつつも、次のように定義している。

主として中学生から大学生にかけての学生を想定読者とし、まんがやアニメーションを想起させるイラストを添えて出版される小説群のこと。また、物語の作中人物も、まんがやアニメーションに登場する「キャラクター」として描かれる、キャラクター小説である¹¹⁾。

大橋崇行は、読者との距離感と軽さについて、次のようにも説明する。

ライトノベルでは、会話文をまんが、アニメーションに出てくるキャラクターと同じように書く一方で、それ以外の地の文についてもあえてラフな描き方をする。意識的に日本語の文法を崩したり、話し言葉的な表現を用いたりといった操作を行う。このことで、もっともコアな想定読者である十代の読者と、同じような立場にいる書き手だということを「演出」する¹²⁾。

想定読者層や要件などの点において、ライトノベルの定義には揺らぎがあることは否定できないが、「ライト」という修飾が物語るように軽い読み味や親しみやす

い粗い文体、アニメ調のイラストレーションを用いた装幀や豊富な挿絵がライトノベルの特徴となっている。

佐藤ちひろは、「端的に言えば、ライトノベルは文字でマンガを描いているのである。現実ではなく、マンガの画面を写生しているのだ。」¹³⁾と述べ、漫画と類似した制作手法がとられている点をライトノベルの特徴として挙げている。粗い文体とアニメ調のイラストレーションを用いて、あたかも漫画を書くように創作されるライトノベルは、読者との距離を狭め、スピード感を生み出すこと可能にしている。

こうした特徴をもつライトノベルの大人向けの作品がライト文芸という位置づけになる。

(5) ライトノベル読書の量的な側面充実への貢献

中学生がライトノベルやライト文芸に惹かれる現状は、1970年代後半の状況と似ている。当時はまだ、夏目漱石や川端康成、壺井栄、伊藤左千夫、武者小路実篤、J. ウェブスターなどの作品が中学生に読み継がれてはいた¹⁴⁾が、角川書店のメディアミックス戦略によって横溝正史や森村誠一の作品が急速に台頭してきた頃である。「学校読書調査」の結果を見ると、横溝や森村の他に、眉村卓や星新一の作品も確認できる。

岡田滋男は、横溝や森村のような「中・高校生好みの“時代の脚光を浴びた著者”群」に共通する魅力は「どんどん読み進められる」ことであったと分析しており^{15,16)}、「面白さを求めるのに急な現代っ子たちは、本も、テレビ画面のように、マンガのページをめくるように、パッパと読み進められなくては気に入らない。」¹⁷⁾と、テレビや漫画との類似性を指摘している。そうした作品について、岡田は、文学的感動や文章表現のうまさなどはほとんどないと極めて辛辣なコメントを寄せてもいる¹⁸⁾。横溝や森村の評価については異論もあるが、当時の中高生の価値観を炙り出すという点で岡田の主張を受けると、読書対象に対する中高生の要請が「文学的感動」や「文章表現のうまさ」から「軽さ」と「スピード感」に移り変わっていったと整理することができる。それは、作品とじっくり向き合い、対話を重ねることによって深く掘り下げていくものとは異なる読書である。

若い世代が横溝正史や森村誠一の作品に見出した「軽さ」と「スピード感」という新しい価値・魅力は、大橋崇行や佐藤ちひろが述べているライトノベルの特徴とほぼ一致する。メディアミックスという販売上の戦略も、横溝や森村らの作品が隆盛を極めた時と同じである。

ライトノベルは、従来型の「ヘビー」な読書に抵抗感を持っていた者にも読書に親しむチャンスを与え、結果、不読率の低下を導き出した。また、アニメや漫画の感覚で素早く読めることから効率よく読書量を増やすことにも貢献した。「推進に関する基本的な計画」の影響によって、読書の量的な側面が強調された昨今の状況に、ライトノベルやライト文芸は適合しているのだと言える。しかし、一方で、洗礼本の存在や課題図書・推薦図書のような存在も事実上消え、中学生への選書の縛りが次第に無くなっていく中、「読んでさえいれば何でもよい」という状態が出来

つつあることも否定できない。

(6) 単なる娯楽としての中学生のライトな読み方

2018年7月、北陸地方の中学校3校（国立1校、市立2校）の中学3年生に対して読書アンケートを実施した。下の【表6】は、質問No.5「家などで読書をする時に、国語の授業で学んだ（体験した）読み方を活かすことがありますか。」に対する回答¹⁹⁾の集計結果である。

【表6】

在籍生徒数	不参加者数	本間有効数	活かすことがある	活かしていない
469	31	438	94 (21.5%)	344 (78.5%)

国語の読みの学習経験を日常の読書の際に「活かすことがある」という回答をした中学生は、調査対象全体の21.5%（94名）であった。これは活用を自覚している人数である。実際には、それ以上の中学生が無意識に活用を行っていると思いたい。【表6】の数値を見る限り、8割近い者が、読解などの国語学習と日常の読書活動とを完全に切り離している、または全く別のものとして認識しているという姿が窺える。

「活かしていない」とする理由についての詳細な分析と考察は別の機会に譲るが、アンケートの自由記述欄には「面倒くさい」「必要がない」「活かし方が分からない」「活かさなくても内容は分かる」などの理由が散見された。そこには、読解学習と実生活（日常読書）の間にうまく接点を見い出せずにいる、せっかく学んだことを活かしていないという困惑ではなく、国語科において身に付けた力を活用する必要性や意義を感じていないというネガティブな意識が見える。しかし、彼らの読書対象のほとんどが「ライト」な作品であるという前提に立てば、これは極めて妥当なものである。言うまでもなく、ライトノベルやライト文芸を深く読むことはできない、深く読む対象にはならないということなどではない。大橋崇行が「ライトノベルがあくまでエンタテインメント小説として刊行されているため、読者が文章を追うだけで、あらずじや内容、テーマが誰でも把握できるように書くことが、きわめて重要視されている」²⁰⁾と述べているように、漫画やアニメ感覚でテンポ良くストーリーを追いかけるという軽快な読み方だけで、それなりに楽しむことができ、また、読破という達成感を味わうことができる「ライト」な作品の特性が、国語科の学びやそこで身に付けた力との距離を作り出してしまっているということであろう。

こうした状況は、見方を変え、多くの中学生が、国語科の学習において経験したような読み方を必要としない作品を読書対象として選んでいるということでもある。それは、「活かせる場面がない」「忘れてる」といった別の記述からも推測できる。また、「ごちゃごちゃ考えて読むと疲れそう」「読書は趣味の範囲」「面白そうに思わないから」などと回答し、国語学習と日常読書とを意識的に大きく引き離そうとしている者もいた。読書は軽く楽しむもの、負荷のかかる国語科の読解な

どとは全く関係の無いもの、関係させてはならないものという彼らのライトな読書観が透けて見える。これは、読書量や不読率といった量的な側面の改善向上のために、行政機関や学校が、そうした中学生の読書に目を瞑り続け、延いては推奨さえしてきた結果であろうと、批判的に解釈することもできる。

5 まとめと今後の課題

「学校読書調査」が始まって以来、長期間、読書量や不読率に明らかな変化は見られなかった。それが急激に動き始めたのは、「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画」の策定に因る。国のリーダーシップが、読書と向き合う場を、ある意味強制的に生み出させ、それが読書量や不読率の改善に結びついたことは疑いがない。非常に大きな量的な成果が導き出され、それは今なお維持されている。

しかし、数値で表すことができる量的な指標とその重視は、実践の成果が目に見えるために自治体や学校が向き合い易かった反面、質的側面の軽視を意図せず生み、それが現在、子ども読書に関する新たな歪みを発生させていることも否定できない。本稿の中で見てきたように、「読書対象」「読み方」「読書観」という3点は、50年前とはかなり異なったものになってきている。誤解を恐れずに言えば、中学生読書の質的低下・質的衰退はかなり進行している。

今後、日本の読書推進活動は、現在の量的に飛躍した状態を保ちながらも、質的な側面についての軌道修正をしていくことが必要であろう。修正の鍵はいくつか見出されようが、その一つはロシアの文学教育ではないかと考えている。そこで、ロシア連邦教育・科学省や教育委員会、教師サークルなどの現地機関の協力を得ながら、2015年よりモスクワ市を中心に学校教育や読書推進に関する調査を進めている。その成果を踏まえた質的側面に関する改善の方向性や改善の具体的な手法等に関する整理については、次の課題としたい。

本研究は JSPS 科研費 JP17K04759 の助成を受けたものである。

引用・注釈

- 1) インターネット上に公開されたオンライン小説など、電子書籍を読む行為も含んでいる。
- 2) 「読んだ」という文言が、「読了」を指しているかどうかは明確ではない。曖昧さを含んだ質問となっている。
- 3) 毎日新聞社『1998年版読書世論調査』毎日新聞社、1998、pp88-92
- 4) 第四次の計画は、名称が「子供の読書活動推進に関する基本的な計画」と微修正された。
- 5) リベルタス・コンサルティング『平成29年度「子供の読書活動推進計画に関する調査研究」調査報告書』2018、pp5-11
<http://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/datas.html>
- 6) 「5月1か月に読んだ本」のベスト20の元データは、学年ごとに男女別で整理

されている。本稿においては、中学3年生のベスト20における男女それぞれの数値を合計し、その上位15作品を掲載した。因みに、書名・作品名、作者名などが特定することができなかったものは本稿表中には掲げていない。

- 7) 1971年の18歳人口(1,846,787)をもとに、5月1か月に『坊っちゃん』を読んだ中学3年生数を推定すると、全国で138,501名となる。
- 8) ライト文芸はキャラクター文芸などとも呼ばれており、『ビブリア古書堂の事件簿』(三上延)のような作品が該当する。ライトノベルとは挿絵の扱い等の点でいくつかの相違はあるが、同様の性質をもつものとして本稿では同一視する。
- 9) 越谷和子「時代を超えて読まれる本——洗礼本」『学校読書調査25年—あすの読書教育を考える—』毎日新聞社、1980、pp10-26
- 10) 竹内洋『教養主義の没落』中央公論社、2003、p66
- 11) 大橋崇行『ライトノベルから見た少女／少年小説史』笠間書院、2014、p41
- 12) 同上、p25
- 13) 佐藤ちひろ「表現のバイオニア」『ライトノベル研究序説』青弓社、2009、p64
- 14) 毎日新聞社、前掲書、pp195-197
- 15) 岡田滋男「著者——好きな著者とその作品」『学校読書調査25年—あすの読書教育を考える—』毎日新聞社、1980、p92
- 16) 1979年の「学校読書調査」において、「作家のどういうところが好きですか」という質問がなされている。横溝・森村の両作家の作品の「どんどん読み進められる」点を指摘している中学生は、それぞれ26.6%と21.3%であった。岡田滋男の主張を裏付けるような数値の高さは見られないが、それは作品の特性を尋ねた訳ではないということが理由であると考えられる。
『1980年版読書世論調査』毎日新聞社、1980、p90
- 17) 岡田滋男、前掲書、p92
- 18) 同上
- 19) 欠席者及び本問に回答していない者の数は「欠席等」として一括した。
- 20) 大橋崇行「中学生・高校生による読書の現状とその問題点」『東海学園大学研究紀要人文科学研究編』No.21、2016、p15

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所『第2回放課後の生活時間調査』2014
https://berd.benesse.jp/up_images/research/2014_houkago_all.pdf
- ベネッセ教育総合研究所『子どもたちの読書活動の実態に関して』2017
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/040/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/09/21/1395532_001_1.pdf
- 秋田喜代美「これからの読書を考える」『児童心理』No.1055、金子書房、2018、pp1-10
- 毎日新聞社『読書世論調査30年—戦後日本人の心の軌跡—』毎日新聞社、1977

米谷茂則『小学校上学年児童から中学生の読書の研究』現代図書, 2009

押上武文「学校教育における読書活動の意義」『日本語学臨時増刊号』Vol.24,
pp28-37

「特集『読書離れて、ほんとうなの?』」『子ども+』Vol.6, 雲母書房, 2001

「特集1『読書離れにいとむ』『教育と医学』No.655, 慶應大学出版会, 2008

(おりかわ つかさ・金沢大学)